

# 東北紀行

## Tohoku Travelogue

第 28 号/2019 年 4 月/編集：丸岡泰（石巻専修大学）

慶長使節 400 年

### 石巻徒然

医療事業再生機構 理事長 平塚良成

老朽化にて入船不可となっている復元船サン・ファン号の内覧会の企画を知り、仙台への出張予定を内覧会に合わせスケジュールを組むこととなった。同所へは 2007 年以來の 2 回目の訪問となるが、船内を見る最後の機会になるのではないかと心を躍らせた。前号ではサン・ファン号の規模、造船技術、性能等、当時としては最先端の帆船であることが説明されていることから、本号では慶長使節が 400 年後の石巻に示唆することをレビューする。郷土の歴史、人々の足跡や想いを深掘りする取組みは観光のみならず地域振興の原動力にもなる。

伊達政宗の名代の支倉常長及び慶長使節団に関わる興味は尽きない。サン・ファン号は多くの日本人を乗せ月浦（石巻市）から出帆し太平洋を 2 往復した。最後はスペイン領であったルソン（現フィリピン）で売却され、支倉常長は便船で長崎を経由し出航 7 年後に帰仙したとされている。その間、鎖国令が発せられた事など、激変する国内情勢を被せてみると実に興味深い。サン・ファン号の復元船は 1993 年（出帆 380 周年目）に石巻市内で進水され、1996 年より渡波（わたのは：石巻市）にある宮城県慶長使節船ミュージアム「サン・ファン館」のドックに係留されている。渡波は漁港としての歴史も古くかつては製塩も盛んであった。万石浦の入り口に位置していることから、現在は渡波及びその周辺（石巻湾）では海苔や牡蠣の養殖も盛んである。

石巻は江戸時代の初期に伊達政宗の命により北上川の改修が行われ水運が盛んになった。その流域（藩内、南部藩、一関藩、八戸藩）からの米が湊（みなと：石巻）に集積され、蝦夷地からの海産物は函館を経由し、下北半島や津軽半島の青森ヒバが集積され、千石船で江戸へ物資を運ぶ奥州随一の港であった。現在、日本国内には 2,866 の漁港があり、その重要度で漁港は 5 分類されている。重要度が最も高い「特定第 3 種漁港」は全国で 13 箇

JITR(Japan Institute of Tourism Research)-Tohoku 所(全体の 0.45%)、2 番目に重要度の高い「第 3 種漁港」は 114 箇所(全体の 4%)あるが、宮城県には特定第 3 種漁港が 3 箇所、第 3 種漁港は 2 箇所あり、石巻市には石巻漁港（特定第 3 種漁港）と渡波漁港（第 3 種漁港）がある（水産庁）。石巻は古くより海運業と水産業で栄え、名実ともに東北随一の港町である。現在は仙台市に次ぐ県内第 2 の都市ではあるが、陸上交通に関しては江戸からの主要街道（奥州街道）から外れ、明治以降も東北本線、東北自動車道、東北新幹線からも外れている。人口は 1985 年をピークに減少に歯止めがかからず、現在は 15 万人を割り、2040 年頃には 10 万人程度（100 年前：1920 年の水準）まで減少すると想定されている（宮城県）。

400 年前の慶長使節の 1 回目の航海は常長を含め 180 名が乗船していた。一行は 3 か月かけて太平洋を横断しアカプルコ（メキシコ）に渡った。そこでは欧州に渡る者、帰国する者、同地で定住する者に分かれた。欧州行きの一行は陸路でメキシコ市へ移動し、スペインの軍艦に乗船し大西洋を横断した。その間、悪天候でキューバにも寄港している。到着したスペインのコリア・デル・リオ（現セビリア県）では数日間滞在したようであるが、その時に同地に定住した日本人の末裔とされるハボン（Japón）姓を名乗る人が 600 名程度居る。同地では近年「スペイン日本支倉常長協会」が設立されるなど、日本との関係を深める機運が高まり、DNA 鑑定により真偽を解明しようとする日本の研究グループも出てきている。また、カナリア諸島（スペイン）はかつて日本の遠洋漁業の基地があり多くの日本人が居住し日本人学校もあった場所で、同所にもハボン姓を名乗る人が居る。

その後、一行は陸路でバルセロナを経由し再び船でローマに向かうが、その途上、悪天候のためサン・トロペ（仏）にも寄港した。慶長使節団の最終目的地であったチヴィタヴェッキア市（イタリア）と石巻市は姉妹都市であるが、スペインのコリア・デル・リオはもとより、期せずして寄港したキューバやフランスのサン・トロペも日本人が初めて訪れた地であり、少なからず一行が恩義を受けた地であろう。東日本大震災で壊滅的な被害を受けた石巻の牡蠣の養殖事業者に、フランスの有志より寄附があり養殖棚の再建に使われた。その背景にはフランスのカキの養殖はこの 50 年間で 2 回の壊滅的な被害を受けているが、その際に万石浦（石巻市）の種ガキを輸入して復活している。フランスでは「日本の牡蠣がフランスを救った」とも評されている。イラン・イラク戦争が激しさを増す最中、トルコ政府がトルコ航空機を 2 機用意し日本人を救出した話（1985 年）や、ポーランド政府が阪神・淡路大震災で親を亡くした子供たちを震災の翌年の夏休みに同国に招いた話（1996 年）の背景には、共通して善意の連鎖が有ることを忘れてはならない。



作者：上田 徹 氏（玄綜合設計 代表取締役）

の船の再建は財政上の理由から不可能といわれている。その話を友人の建築家に話したところ、ステンレスを使い船の骨組みだけでも原寸大で残したら如何だろうかとの話を頂いた。ステンレスであれば建築コストも安く、50年程度はほぼメンテナンスフリーとの事。同氏の専門は神社仏閣などの木造建築であるが、常に復元船と同様の木材の耐久性の問題に直面する。解決策として新素材を活用する事を得意とする。江戸時代の物流を担った北前船（日本海）や千石船（太平洋）などの和船は幕府の規制もあり、大きいものでも150トン程度といわれている。それに対して石巻製のサン・ファン号の設計は西洋の外洋船である。規模は和船の3倍以上の500トン。船底からメインマストまでは約50メートル（15～6階建てのビル）の高さが有り、その雄姿は現在においても壮観そのものである（パース参照）。

復元船及び同船が係留されているミュージアムは観光資源としても貴重であるが、世界に門戸を開いた国際水産海洋都市「石巻」の歴史の象徴でもある。復興後の石巻港には10万トン超の大型クルーズ船も入港しているが、実績面では九州の港に大きく水をあけられている。陸路、空路（仙台空港）に加え、水路の活性化を図り奥州（東北）の玄関口として、また、国際交流の促進にて国際都市として、福祉の充実で住みやすい街として、石巻の再興と飛躍を期待したい。加えて、石巻に大学があることは大きな強みである。世界には大学を核として発展した都市が多くある。若者が集まり、文化が醸成され、留学生が国際化を進展させ、街に活力を与えてくれる。願わくは古の絆を大切にすることで、アジアのみならず世界中から留学生が集えば、令和の時代は想定を凌駕する化学反応も期待できるであろう。大きなサン・ファン号を眺め、古の海を航海した人々に思いを寄せながら、石巻の牡蠣や海の幸を肴に石巻の日本酒を堪能したい。

少子高齢化に加え、人口減少が続く我が国においては更なる町村合併や消滅自治体の話が現実のものとなるなど、地域や自治体のサバイバルが始まっている。誰しもが「おらが街」の存続や繁栄を願うが、「産めよ、増やせよ」の時代は今や昔。嘗ては、国土の津々浦々まで開拓され人が住むようになったが、今や逆の流れが主流である。何処に住むのも自由な社会ではあるが、医療・介護などの福祉を考えると、残念ながら従来のような遍くサービスの提供は難しくなっている。基礎自治体

（市町村）の数が減り、行政面積が拡大することから、福祉のみならず自治体の経営そのものをより戦略的なものとし、効果的・効率的な成果が求められている。その為には行政のみならず住民、企業等、地域に関わる人々が一体となる協業が不可欠である。本年1月には石巻に隣接する自治体が地元の国民健康保険（公的）病院の赤字を理由に「財政非常事態」宣言を行った。今後、同病院の業務縮小などが想定されるが利用者や住民にとっては衝撃的である。福祉は生活の根幹であり、福祉経営の良し悪しが街の将来をも決めるであろう。労働力の確保ができなければ、人口減少社会では企業の進出も無ければ新たな産業も生まれない。そのような状況では街の発展も期待できず、観光業の深化も難しい。他の地域との差別化を図り魅力ある街づくりには、福祉の充実はもとより、既存の産業や企業等との関係を密にしながらも、歴史的背景や先人達の意思を今一度振り返り、地域の魅力を発掘する取組みも必要であろう。

戦乱に明け暮れていた時代に欧州に使節を送った背景には何があったのか、先人達の経験やミッションを探る必要があるのではないかと。北上川の流れを変える取組みは港町としての繁栄を石巻に齎し、米の集積地として東北の内陸部との結びつきを強固にし、石巻の酒造業をも発展させた。また、先人たちの強い意志とは別に、遭難時の縁がもたらす怪我の功名も無視できない。日本で最初に世界一周を果たしたと云われる津太夫（つだゆう）も、石巻を出港し江戸に向かう途中暴風に遭い漂流した海難事故がそもそもであった。外国での善意と助けがあつて最終的に帰仙したのは遭難後13年目であった（世界一周を達成）。慶長使節団のメンバーや津太夫のみならず、石巻から出帆し異国で恩義を受けてきた者や、外国に留まった者も少なくない。江戸時代、唯一の外国との表玄関は長崎であったが、水運の要衝であったことやサン・ファン号の背景を考えると石巻は外国への通用門であったことは否定できない。サン・ファン号の復元船は将にその象徴であり、国際水産海洋都市石巻の希望の塔でもある。残念ながら復元船は老朽化し、同等